

交感の指標性とチャンネルの記号論：言語人類学の視座

野澤俊介（北海道大学）

発表要旨：

言語人類学（または「社会記号論系言語人類学」小山 2008）ではパース記号論とヤコブソンの動的な構造機能的視点との交差点を軸に、象徴記号体系としての言語をデフォルトのモデルとした（ソシユールのカルクの）思考の限界を示しつつ、コミュニケーションの出来事に投錨される多様な記号過程に目を向けてきた。とくに指標性（indexicality）とそれを統制・変調・再生産する記号過程（metapragmatics）の関係性に着目し、その諸条件と帰結について膨大な民族誌的知見の積み重ねがなされてきた（名和 2020）。

一方、そういった社会記号論研究の中では比較的注目されず埋もれてしまっていたマイナーな研究領域として、コミュニケーションの出来事における「チャンネル」に関わる記号過程がある（cf. Kockelman 2010）。ここでいうチャンネルとは、単純に、複数の場所や人、集団、物質や存在をつないだり切断したりすることを指す。本発表では、出来事の開始や監視、すれ違いや共鳴、摩擦や整頓、移動や占拠、アクセシビリティや忌避といった、チャンネルの上・中・外で巻き起こる様々な参与体の様相と参与枠組を指標（前提・創出）する記号過程を、Jakobson (1960) に依拠して、「交感」（phatic）的指標とよび、その今日の意義を考察したい。この概念整理が可視化するのには、交感の指標性がコミュニケーションの実践における具体的な基盤に不可避的に関わるということである。したがって交感指標に着目するチャンネルの記号論は、プラットフォームやインフラストラクチャなどメディア研究の問題系と密接につながるものであると同時に、霊媒（Manning 2018）やあいさつなどの相互行為儀礼（cf. 木村・花村編 2021）など、多様なコミュニケーションの出来事性を分析の対象とするものである。

本発表では、言語人類学における指標概念の展開を簡単に振り返った後に、ここ数十年ほどの間に発表されたチャンネル・交感の民族誌的再考の主だった研究や具体的事例を紹介することで、チャンネル論の展望を指し示したい。

Jakobson, Roman. 1960. Linguistics and Poetics. In Thomas A. Sebeok ed., *Styles in Language*, 350–77. Cambridge: MIT Press.

木村大治・花村俊吉編. 2021. 出会いと別れ—「あいさつ」をめぐる相互行為論. ナカニシヤ出版.

Kockelman, Paul. 2010. Enemies, Parasites, and Noise: How to Take up Residence in a System without Becoming a Term in It. *Journal of Linguistic Anthropology* 20 (2): 406–21.

小山亘. 2008. 記号の系譜：社会記号論系言語人類学の射程. 三元社.

Manning, Paul. 2018. Spiritualist Signal and Theosophical Noise. *Journal of Linguistic Anthropology* 28 (1): 67–92.

名和克郎. 2020. 「言語人類学」と「指標性」の概念をめぐる. 文化人類学 84 (4): 431–42.